

「キャッシュレス社会の到来と便利の価値観」

村瀬 玄悟（愛媛県立今治西高等学校2年）

現代、先進社会はコンピュータ社会といわれるように、その機械の能力に頼った仕組みを選択し、人間はそのコンピュータに識別されるようにコード化されることが一般に行われるようになった。いわばそれは、社会機能の中心にコンピュータという機械を据えることで、生身の生き物である人間までもその機械の知能と言葉に置き換えられて存在を認められる、という奇態な現象を現出しているのである。

そのことをさらにいえば、日常の暮らしとして隣人が隣人を互いに見知っているという事実をそのままに、公的機関ではそれらの人物の存在がコンピュータの登録内容に証明されなければならない、という二重構造を作り出している。そしてそうした状態を、一様に便利になったと喜んでいるが、社会においてその便利性の意味や正しさまで検証されたことがあっただろうか？それとも、される必要などないことなのだろうか？

僕には、不便より便利がいい、遅いより早いがいいという論理の、～より～がいいという対比による判定には、真実の意味が曖昧にされるという危険が内在されているように思える。

そうした視点を「お金」に当ててみれば、問題はよりはっきりとしてくるだろう。

例えば現在、銀行からの振込を実行した場合、現金よりカードが推奨され、優遇されている。それは振込料という料金に反映して、利用者に向けられる選択であるが、意図して負担金の少ないカードの選別を誘導していることは明らかである。

その過程をみると、カードによる振込は現金を数字（コンピュータ言語）に置き換え、その処理をコンピュータに媒介させることで、通貨としての機能性を一歩前進させたかのような錯覚を利用者に見せている。その方法は明確に差別を示しているのだが、その意図が「現金」という実体よりも、記号という概念の方に価値を与えていることに、強く注目されなければならないだろう。

つまり私たちの社会は、「お金」という実物さえ人間と同じように「記号化」し、そのことの方の優位性を容認する理解を、市民に求め始めたのであると受け止められる。

しかし、媒介するものがその具体的姿を見せずに流通する事態を、僕たちは安易に容認していいのだろうか？その前にしっかりとそうした状況を理解し、その意味するところを受け止めておく必要があるのではないのだろうか？

昔、我が家で冷蔵庫が購入された時、その代価が家族の目の前に積まれたことがある。父親のサラリーも毎月、家族の目に触れる形で家庭に入った。すると、父親の稼ぎとその冷蔵庫の代価が子供の目にもはっきりと比べられ、お金の価値を読み取ることができた。

そうした体験をしてみると、お金が単に数字となって通帳上で増減する現代の機構では、物の代価としての値踏みが実態を具現していた昔より希薄になる、という指摘には理由を見なければいけないように思える。

そのことはそしてまた、「お金」という理解にかかる個人の数理感覚にも、多大な影響を与えるものになるのではないだろうか、と僕には危惧される。

例えばそれは今、一円が道に落ちていても拾う人がいない、という事実を見ると「お金を大切にしろ」という社会常識が、その物の価値を値踏みすることの前に、意味を失いつつあるように僕には思えるのである。同じようにそのことは、「チリも積もれば山となる」とか、「一円を笑うものは一円に泣く」という儉約の教えも笑うものになるような気がする、といえれば極論で説得力のない想像と笑われるだろうか？

しかし、物が豊かであることとそれを浪費してよいということの間には、明確な文明倫理としての良識という軌が、我々の歴史には伝承されてきたと信じる。その軌がはずれつつあることの理由の一端に、便利であることを優先させるがために社会の構成を記号化させることと、それを誘導するコンピュータの存在が、深く関わっているように僕には思えるのである。

しかも、お金の価値を実物から取り上げることは、次にカード社会という虚像の世界を現出させることに繋がった。即ち、実体としてのお金に対する絶対的な信頼によって支えられてきた社会の経済活動が、カード所有者の「信用」という単に概念に過ぎないものにも価値を与え、その存在の未来までを担保に価値を生み出そうとし始めたのである。

このことを不思議に思わない社会の価値観は、少し奇妙なものではないだろうか？

つまり、お金はその実態として遣うという状態で価値があるのに、「払います」という契約の方により高い価値を置く社会は「信用社会」とでも言えばいいのだろうが、しかしやはりその信用が社会の中の「契約」に過ぎないという、つまり非実体である、という事実は明確に理解されておかなければならない、と僕は思うのである。

そういう視点に立てば現在の経済活動は、未来の収入までも現在の市場に取り込んでい、大袈裟に言えばふくれ上がった虚像社会を必死に牽引している活動にも見えるのであるが、それはいわばこぎ続けなければ倒れる自転車の有様に似ている。

しかし、人間は明日ばかりを追って生きているのではないだろう。今、この瞬間しか確かなものはなく、明日は夢に過ぎないという事実を忘れては、やはり人は未来を誤らせるように思える。お金の価値も、今この瞬間に流通できるという力に価値があることの実実は、決して忘れられていいことではないだろう。

だが、僕たちの社会は「進歩」という目標の舵取りを「便利」というひとつの価値に傾けてしまった。それが人間の持つ多くの価値観の「ひとつ」に過ぎないのに、そのものの比重を高くしたことの意味と責任は、すべての国民がこれから未来にわたり、しっかりと認識続けていく必要があるように思える。

カード社会が浸透し、キャッシュレスの時代が到来することは、その是非を超えて近い将来に必ず実現されることだろう。その時、その社会の根底に借金が大きく育つことや、ものの値打ちを測る尺度の変容が始まるだろう予測を含めて今、僕たちはもう一度「お金」という実体とその意味を、文明の未来とかけ合わせて考えてみる必要を痛感している。